

## 米国での学会発表



(株)宇部スチール

糸 藤 春 喜

### 1. はじめに

1988年以来、種々の社用による米国出張が7回、通算で滞在日数が90日を超えるまでになった。主に学会発表、技術交流、工場視察、技術営業等の出張である。振り返ってみると、交流の起点となりうる要素を最も多く含んでいたのは、学会発表であったように思われる。社用的要素が薄いと思われがちだが、同業社、大学・企業の研究者、コンサルタント、資材屋さん等、比較的幅広い人達との接触が可能であり、そこから交流の起点が芽生える要因が多い。以下に、これまでの小生の経験を述べてみる。

### 2. 学会発表

最初は発表だけで精一杯であったが、米国での学会に参加・発表している内に、周囲の人と話す機会が増えて来た。彼らを通じて、日本人の発表に対する批評がだんだん分かるようになった。米国内での外国人の発表能力は、東洋人が他の地域に比べて劣り、その中でも日本人が最も出来が悪いらしい。論文は書けるが、発表となると何を言っているのか分からず、ディスカッションとなるとお手上げの日本人が多いからである。従って、内容的に余程アピール性の高い良い論文でないと、会期内に巡って来る何度かのゴールデンタイムに、日本人の発表が割り当てられることはない。主催者側としても学会が盛り上がるように、そのような時間帯には、聴衆動員数が期待できる論文発表を割り当てたい意図があるようだ。会期の終盤ともなると、会場が閑散となり、学会関係者のみの聴講となることも珍しくない。学会がリゾートで開催されることが多いためである。小生の発表は、幸いにしてどれも比較的良い時間帯で発表出来た。しかし、最初は、小生も上述のような典型的な日本人発表者であったように思う。星条旗を前に発表した様子を写真1に示す。

米国での発表論文は、当初の狙い通り、もれなくGiesserei(独誌)にレビューされた。これは、1981年に独のアーヘン工科大学のS.Engler教授(昨年退官)が来日した際、小生にアドバイスをくれたのがきっかけとなっている。同教授は、いくら良い論文でも、日本語で書いたのでは、世界へのアピールは出来ず、その論文を見た別の人が同様の内容で英語論文を出せば、その人の方がイニシアティブを取れるというのである。日本語に比べて独語の方が全世界に対してポピュラーだが、独人でさえ英語文を出す必要性を感じていると断言した。その後、以下のような情報の流れに気付き、やはり英論文を発表しておいて良かったと思った。Giessereiでレビューされた一例として、小生の黒鉛球状化理論「サイト説」の概念図を図1に示す。

米国で論文発表 → 良い論文であれば、 → 独語レビューが和訳され、  
Giessereiで独語レビュー → 日本に帰って来る

### 3. 企業との企業交流

オハイオ州シンシナティのCast-Fab Technologies, Inc.とは、10年来の技術交流を行っている。社長を中心とする幹部一同が、1990年に米国鋳物協会(AFS)が主催した講演会で、小生が発表した論文に興味を示したことがきっかけとなった。同社に出向き、ディスカッションを交えながらサイト説について4時間にも及ぶ講義をした。その後も同社にサイト説が支持されており、鋳物の品質向上に貢献しているものと思っている。特に、小生が開発した熱バランサーは、ハッピーライザーの愛称で使われ、鋳造方案技術として定着してい

るようである。逆に我々も、同社を通じて色々なことを学んだ。彼らを通じて学んだことには、以下のようなどがある。

#### 1) オーナー社長のバイタリティ

「さすがにオーナー社長は違う。」と感ずる。ポリシーが明確で決断が速い。事務屋であっても技術をよく勉強・理解しようとする姿勢があり、会社の歩むべき方向を部下に示している。その方向に沿う能力のない人は解雇となり、新たに別の人を雇い入れる。これらの対象となるのは、主に管理職である。この会社において小生が知っているだけでも、8年で管理職が3人入れ替わった。

#### 2) トラバークと技術者の成長

5回会社を移り変わると一人前の技術者になれるとされている。但し、ヘッドハンティングや自らの希望での移籍は良いが、解雇ではケチがつく。後者のケースも多々あるらしい。

#### 3) トラバークしても人脈は生きている

移籍を繰り返しても、各々の会社で知り合った友達とずっとパイプが繋がっているというから面白い。旧友を通じた情報の交換も頻繁に行われているようである。人脈が幅広い程、情報源が多いことになる。

#### 4) 米国人も日本人同様によく働く

米国でも電力料金の安い夜間に溶解し、早朝鑄込みする工場が多い。この会社も同様で、その鑄込みに合わせ現場、品質保証関連の課長も出勤して来る。

通常、鑄込みに責任のある管理職は、朝5時に出勤し、夕方4～5時に退社すること。鑄込みは、品質が決まる重要な工程であり、小生も訪問の度に立会うことにしている。この会社では、溶解の他に鑄仕上げも夜間作業している。

#### 5) 80年代衰退期の現業界への付け

米国では、90年代になって鑄造業が復活したが、80年代のあおりを食らって、40～55才の技術者が枯渇している。大学の先生についても同様なことが言えるらしい。現在の流れからすると、日本も二の舞になりそうだが……………？

現在では、技術交流の他に、同社を北米の情報収集源として活用している。また、英論文の文章チェック及び内容に対するコメントを依頼している。主要交流者に次男が多いことから、「Second Son Society」なる名称でE-mailのやり取りをしている。団子三兄弟のキーホルダを土産に持って行き、歌の内容を説明した。予想通り受けた。

### 4. 大学教授との出会い

特に親密な関係はないが、小生の発表の全ての場に、ウィスコンシン大学のC.R.Loper,Jr.教授が顔を見せている。米国鑄物協会の大御所的な存在である。同教授とは、学問上の対抗馬的な関係にあるだけに、よく質問して来る。そして最後に「君の言いたいことは分かった。中々良い研究だ。しかし、私は同意出来ない。」と言う。しかし、それは講演の場だけである。プライベートで食卓に同席して一般的な話をしたりする間柄である。会話に対立感はない。実に立派な紳士と思う。彼の奥さんとも何度か話すチャンスがあった。話の内容は、お互いの家族に関すること等であり、日本の同年代(65才位)の人と同じ感覚を覚えた。

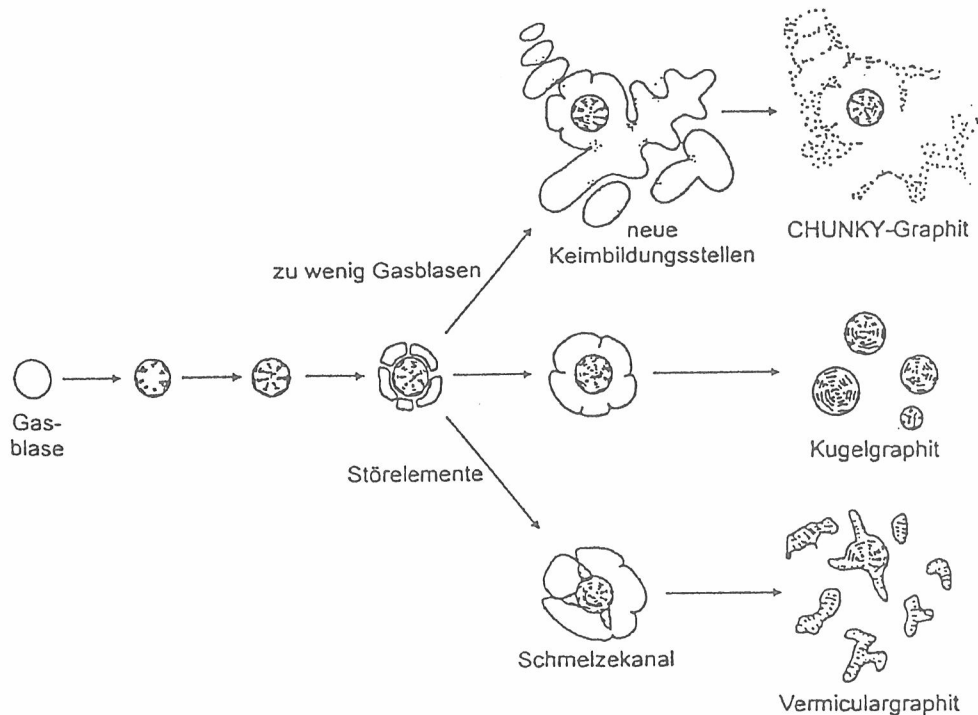
## 5. 日本商社

最近の米国における日本商社は、現地人を多く採用する傾向にある。しかも、日本語が話せない人の方が多い。日本語を期待して行くと、大変なことになるケースが出てくる。米国でうまく交流するには、自己アピール、ディスカッション能力が必要であると共に、英語能力「読み、書き、話す」が必須となる。

## 6. まとめ

少し硬い話になったが、米国での交流が極めて難しいわけではない。上述は、理想を込めた願望も含まれており、小生に特別な能力があるわけではない。あるとすれば、好奇心だけである。少しでも交流の様子を、写真2に紹介しておく。

以上



**Bild 1.** Schematische Darstellung der Graphitbildung in flüssigem Gußeisen, [5]

Giesserei 83 (1996) Nr. 11 · 27. Mai

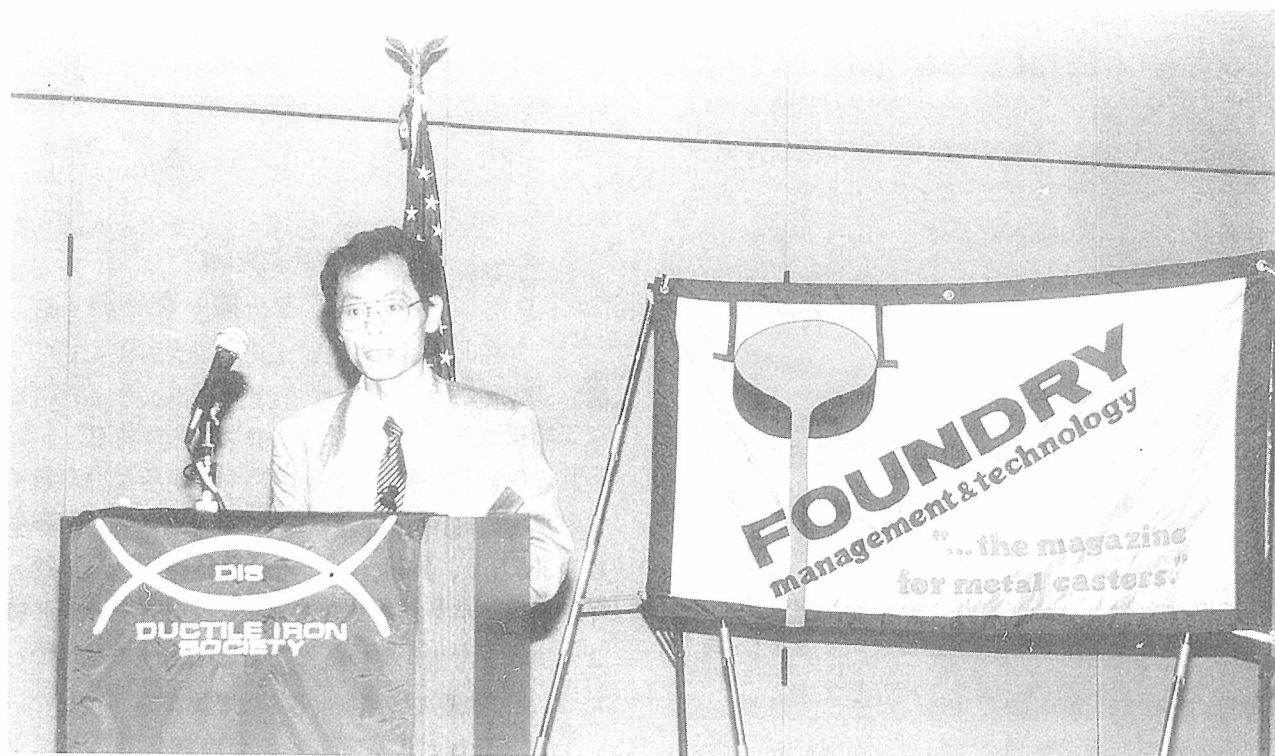


写真1. '93 Keith D. Millis 国際ダクタイル鋳鉄シンポジウムでの発表の様子  
Hilton Head Is., SC, USA ('93. 10. 19~22)



Mr. Dr. Prem Mohla      Mr. Eli David      President Mr. Ed Snyder      小生

写真2. '98 Keith D. Millis 国際ダクタイル鋳鉄シンポジウム後の懇親風景  
Globe Metallurgical 社一行と小生, Hilton Head Is., SC, USA ('98. 10. 19~22)